

# スパイダー・フォレスト／懺悔

2005(平成17)年4月10日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★★



監督・脚本=ソン・イルゴン／出演=カム・ウソン／ソ・ジョン／カン・ギョンホン／チャン・ヒョンソン (ムービーアイエンタテインメント配給／2004年韓国映画／120分)

……韓流ブームの中、大阪では地味に(?) 1館だけで公開された複雑で難しいミステリー。「ワタシヲ殺シタノハダレ?」という思わせぶりのコピーとヌード姿が印象的なチラシだが、ストーリーはメチャ難しい。しかし、「四天王」に続く(?) 主人公もカッコよく2人の美人女優も最高! しんどい時間を過ごすことになること必至(?) だが、一見の価値あり……?

## スパイダー・フォレストとは?

私はこの映画の看板やチラシは見ていたが、間の抜けたことに『スパイダー・フォレスト』とは何のことかわからないままだった。映画鑑賞後、パンフレットを読んで、「蜘蛛の森」のことだと言われ、そりゃそうだと納得。

この映画のパンフレットには映画評論家、滝本誠氏の解説があるが、これが何とも難解なもの。彼の解説によるとまず、『スパイダー・フォレスト』と言っただけで、「否定しがたい淫靡さが匂いだしてくる」とのこと。ホンマかいな……? また、後述のようにソン・イルゴン監督の長編デビュー作となった『Flower Island』(01年)の「花」と「鳥」を光の語とすれば、蜘蛛の森は闇の語であるとのこと……? その他、「なるほど」と思わなくはないものの、きわめて難解な「蜘蛛」についての解説が……。さて、あなたはこの映画を観て、そして『蜘蛛の森』というタイトルを聞いてどんな印象を持つだろうか……?

## 主人公カン・ミンを演じるのは?

この映画の主人公はカン・ミン。これを演じるのは韓国のペ・ヨンジュンや

イ・ビョンホンら「四天王」に続く人気俳優といわれているカム・ウソン。私がこのカム・ウソンを観るのはこの映画がはじめて。もちろんハンサムだが、「ヨン様」のような甘さだけ(?)ではなく、かなりワイルドな感じもあり、たしかにこれからの成長株のよう。しかし私にとっては、はじめてみる顔だから、ふつうにその姿を観せてくれればわかるはずだが、血を流したり、頭に包帯を巻いたり、暗い森の中をさまよったりしていると、一瞬誰だかわからなくなってしまう。さらに彼がテレビ局のプロデューサー的な仕事をしていることはわかるものの、妙に滅入っている姿や局長のジョンピルからボロクソに言われている姿、そして後述の新妻ウナ(ソ・ジョン)と幸せいっぱい生活している姿などが交互に出てくると一体これは誰?と一瞬訳がわからなくなる。多分ミステリー色に富んだこの映画はもともとそんな効果も狙っているのだろうが、私は日本人だから韓国の俳優についての予備知識が少ない分、余計にミステリー性が高まってくる。

## 印象深い女優その1 カン・ギョンホン

すごい美貌とスレンダーな肢体の持ち主で映画初主演ながら、大胆なヌードによるセックスシーンを強く印象づけた女優がカン・ギョンホン。カン・ギョンホン演じるファン・スヨンはテレビ局のアナウンサーだが、今はカン・ミンの婚約者(?)になっている様子。というのは、奇妙な形でカン・ミンと知り合ったファン・スヨンは、その日のうちにカン・ミンとかなりハードなセックスシーンを演じ、以降ずっと2人はセックスフレンド(?)となっていることがスクリーン上明らかだから。ところが他方で、このカン・ミンが後述のように新妻のウナと幸せそうな生活を送っているから、この映画はわからん……?

わかるのは、このファン・スヨンが問題の発端となったということ。すなわち、カン・ミンの天敵(?)ともいえるテレビ局の局長ジョンピルとファン・スヨンが蜘蛛の森の中にある局長の別荘で不倫をしていたのだ。映画の冒頭、この別荘の中で無惨に血を流して死んでいる局長の姿とほとんど死にかけ状態となっているファン・スヨンの姿をカン・ミンが発見するシーンが登場する。そして映画の中盤では、謎の男から電話でファン・スヨンの不倫を警告されたカン・ミンが、半信半疑で別荘を訪れ、その目の前で展開されるファン・スヨンとジョンピルと

の濃密なセックスシーンをタププリと目撃するシーンも登場。こりゃ大問題となることは明らか。物置で鋭利な鎌を見つけたカン・ミンは、これをもって今にも部屋の中に飛び込みそうになったが……。しかし……？

## 印象深い女優その2 ソ・ジョン

カン・ミンの妻であるウナと蜘蛛の森の近くにある写真館の女主人ミン・スインの2役を演じているのはソ・ジョン。2004年11月23日に観た『春夏秋冬そして春』（03年）と2005年4月6日に観た『サマリア』（04年）の映画評論を書くについて、私はたつぷりと「キム・ギドク監督」を勉強したが、その時強く印象に残ったのが『魚と寝る女』（00年）。私は観ていないが、この映画で新人女優賞を絵ナメにした女優が、ソ・ジョンだ。私はソ・ジョンの顔を見たことがないし、韓国女優の顔は似たようなものが多い（？）ので、この映画を観終わった後パンフレットを読むまで、この2人がソ・ジョンの2役とはわからなかった。

そもそも映画のストーリー自体が、ラスト近くになるまで全くわからない（？）のだから、そこに登場してくる人物の顔と名前と役柄がそう簡単に一致しないのも当たり前……？と一応弁解しておこう……。それはそれとして、1人2役だと言われてみるとこの2人の顔は、たしかによく似ていた（当たり前だが……）が、その雰囲気は全く異なるもの。つまりカン・ミンの新妻ウナはとにかく幸せいっぱいの雰囲気だし、写真館の女主人ミン・スインは曰く因縁をいっぱい持った（？）静かなキャラ。映画の冒頭、かなり長い時間をかけて少しずつクローズアップされていくミン・スインの背中がスクリーン上に登場するが、一体それは何を意味しているのだろうか……？

## チェ刑事はわかりやすいキャラ

唯一その存在や役柄が単純（？）でわかりやすいのがカン・ミンの友人のチェ刑事（チャン・ヒョンソン）。彼は、車にはねられ瀕死状態にあるカン・ミンから片言で、蜘蛛の森の中の別荘の中にある死体の話を聞いて現場に直行。そこで何とも無惨な姿となっている2つの死体を発見した。もちろんこれは、ジョンピル局長とファン・スヨンの死体。瀕死の状態から手術によって生還（？）し、記

憶喪失の状態から脱した(?)カン・ミンは、頭に包帯を巻いたまま、チェ刑事の捜査に協力していたが……? その後の物語の展開はややこしいものの、このチェ刑事のキャラだけはシンプルでわかりやすいのが取り柄……?

## 謎の写真館の登場

謎の写真館は、蜘蛛の森の近くにあるらしい。そしてこの写真館の女主人がミン・スイン。この古い写真館は何ともいえない独特の雰囲気がある。頭痛持ち(?)のカン・ミンは取材の途中、頭が痛くなって寝込んでしまったため、写真館の中で一晩泊まることに。しかしミン・スインから奇妙な薬(?)を飲ませてもらったおかげで、翌朝は元気になり、再び取材することができた。そして、取材のためにこの写真館を訪れたカン・ミンに対してミン・スインは何とも不思議な蜘蛛の森とこの別荘に関する物語を聞かせてくれた……? さてそれは……?

## さらにわからなくなる少年・少女の回想シーン

写真館の女主人ミン・スインが語るのは、昔この森の中の家に住んでいた少女の物語。色が白く目が大きい愛くるしい少女は、なぜかクラスでは嫌われ者。それは彼女がほとんど口を利かなかったから。そんな彼女に興味を示し、優しくしたのは彼女のクラスに転校してきて彼女の隣に座ることになった少年。彼が転校してきたのは父親がこの学校に赴任してきたためだ。仲良くなった2人が、少女の家の中で見たものは……? そしてその結果、少年・少女がたどった運命は……? これまた奇妙な物語で、ますますワケがわからん……?

## 私は蜘蛛が大嫌い!

スパイダーという言葉が最初に覚えたのは、何といっても1970年代に一世を風靡したグループ・サウンズのザ・スパイダース! そのメンバーであった堺正章は今も司会業を器用にこなしているうえ『新春スターかくし芸大会』では毎年大活躍。また、スパイダー=蜘蛛にまつわる逸話や映画は多い。パンフレットには、前述のように滝本誠氏による「蜘蛛のシンボリックな意味」についての高尚な解説(?)があるが、これはあまりにも難解……。

私が知っているスパイダーの映画は、まずはハリウッド人気シリーズの『スパイダーマン』（77年、02年）。これは明るく楽しいアメリカのコミック誌が原作だが、私はあのスパイダーマンの衣装が気持ち悪く大嫌い！ 次に、私が小学生の頃に観て、未だにずっと恐怖心を引きずっているのが、巨大蜘蛛＝タランチュラの物語。科学者がパワーアップする薬を研究していく中、誤って巨大蜘蛛を生んでしまい、これが人間を襲うという単純なストーリーだったのだろうが、子供心に恐怖心を持ち、目を手で半分覆いながら観ていたことを今でもよく覚えている。

私は、蜘蛛が大嫌いで見ただけでもゾツとし、思わず鳥肌がたってくるほど。今でこそ足を長く大きく広げた蜘蛛の姿を家で見るとはほとんどないが、昔は家の中でよく見たものだ。あれを見ると、とにかくダメ。他方、小さい蜘蛛はあまり恐怖心がないが、まさに「蜘蛛の子を散らす」という言葉どおり、小さい蜘蛛が無数に広がっていくのを見てもうダメ。そんな私の大嫌いな蜘蛛にまつわるシーンがこの映画ではチラホラ……。でもチラホラでよかった。これでもか、これでもかと観せられたら、きっと私は途中で逃げ出していたはず……。

## 注目されるソン・イルゴン監督の今後！

この映画を監督・脚本したのはソン・イルゴン。彼は1971年生まれだからまだ34歳の若手で、1970年生まれのカム・ウソンやチェ刑事を演じたチャン・ヒョンソンと同年代。1999年に短編映画『The Picnic』がカンヌ映画祭短編コンペティションで審査員特別賞を受賞し、2001年の長編デビュー作『Flower Island』で、釜山映画祭、東京フィルメックスにて最優秀作品賞を受賞した、韓国で最も将来を期待される若手映画監督の1人とのこと。また、監督のみならず監督作すべての脚本を自ら執筆したとのこと。これはまるで、『黄色い大地』（84年）や『大閩兵』（85年）で撮影を担当し、『古井戸』（87年）では主演男優を務め、そして『紅いコーリャン』（87年）で監督デビューした中国の張藝謀チャンイーモウのような活躍だ。『紅いコーリャン』を張藝謀チャンイーモウが監督したのが37歳のとき。ソン・イルゴン監督の今後の期待される。

2005(平成17)年4月11日記